おがつ いしのわ

雄勝いしのわプロジェクト

平成 27 年 4 月 20 日発行

No.8

～雄勝石産業を核とした場づくり、モノづくり、人づくり

100 年の絆―三井物産・雄勝いしのわプロジェクト

みやぎ地場産品開発流通研究会例会にて　バルセロナ展示会報告

雄勝いしのわシンポジウム開催 ―番町ロビー安全安心生活デザイン学科ウィーク

復興大学にて雄勝いしのわプロジェクト実績報告

三井物産株式会社 東北支社長 佐藤 秀之氏来学

国連防災世界会議　ロビー展　雄勝プロジェクト紹介

雄勝現地調査　未利用材づくり

100 年の絆―三井物産・雄勝いしのわプロジェクト

文 大沼正寛（東北工業大学）写真 今泉俊郎（雄勝町写真家・民俗研究家）

テニスプレイヤーの活躍ニュースから

東日本大震災・巨大津波から４年が経過したが、被災地の復興は途についたばかり。そんな 2014-15 年にも、明るいニュースはあった。テニスの錦織圭選手の大活躍である。実は、１世紀近く前にも、世界で活躍した日本人選手がいた。群馬県蓑郷町出身の清水善造（1891-1977）がその人である。彼の名を世界に知らしめたのは、大正９年（1920）のウインブルドン挑戦者決定戦と翌年のデビスカップ。前者において、アメリカの W.T. チルデンと対戦していた清水は、転倒したチルデンをみて、打ち返せるようなゆっくりとした球を送り、勝利を逃す。翌年の再対決では、清水のマッチポイントに至ったが、サーブがネットを掠めるレット判定を審判が下したことから、またも敗戦となった。後年この審判が、アジア人に杯を渡したくない私情から誤審したことを告白し、清水のスポーツマンシップ談が世界に響いたという。

清水は三井物産の社員であった。農家の生まれだったが、幼少より優秀で、地元素封家・田中孫三郎の学資を得、明治41年（1908）に東京高等商業学校（現一橋大学）に入学、海外商社マンを目指す。明治 45 年（1912）に物産に入社、半年後にカルカッタ支店勤務を命ぜられる。支店長は東京高商の先輩・阿部重兵衛。それまで軟式テニスしか経験がなかった清水に硬式を勧めたのは他ならぬ阿部で、ここからテニス躍進へとつながる[1]。

十五浜名振―三井物産・阿部重兵衛の故郷と石産業

写真１　永沼家住宅土蔵からみる名振浜・名振湾（震災前）

三井物産カルカッタ支店長・阿部重兵衛（18xx-1956）は、陸前国桃生郡十五浜（現宮城県石巻市雄勝町）の一つ、名振浜（写真１）における二大旧家の末裔であった。とくに近世末期の当地方の旧家は、江戸にも多種の産物を直販するなど大海商ともいうべき活躍をみせ、隆盛を極める[2]。天然スレートの民家を撮り続ける共著の今泉俊郎は、実母が重兵衛の姪にあたることから、重兵衛の 50 回忌案内書（2005）を確認したところ、業績を伝えるメモに「三井物産支店長．インド、カルカッタ、ホンコン、大連、東京」と書かれていた[3]。出自と経歴に疑いの余地はない。

旧十五浜エリアへは、仙台から北東へ 80km、現在こそ中心都市から離れた寒村のようなイメージを抱かれるかもしれないが、地図をみればそれが誤解であることは瞭然である。豊かな三陸リアス南部の半島にあって、しかも北上川が太平洋に注ぎ込む河口域は、魚介の豊穣さはいうに及ばないし、かつてはいうまでもなく交通の要衝であった。古代、大量の金を産出した北上川流域へ水運で近づくのにも好都合であったろうし、しかも、他に見られない薄く黒い粘板岩が大量に産出する。この地に中世の修験者たちは法印神楽（国の重要無形民俗文化財）を残し、有形遺産としては大量の板碑を残している[4]。半島中央には雄勝湾が屈曲して突き刺さり、その両岸でとくに良材が採れることから雄勝の産地名が一般化し、近世には雄勝硯が刻まれ現代に至るのである。その評価は、伊達家が無断採掘を禁じるほどであった。

明治に至り、この黒い石は再び別の光をあてられる。上記阿部家を凌いだ旧家・永沼家の養子となり、戊辰戦争ののち東京・横浜で立身を夢見た永沼秀実は、明治６年（1873）、海産物商ともいわれる山本儀兵衛と会う。その人こそは、後に習学芸石盤やスレートの開発を主導し、現地で「山本祭」が行われるほどに神格化される人であった。山本は永沼に連れられ、雄勝浜の奥田製硯で一片の玄昌石を拾い持ち帰る。同年は学制が公布され、それまで輸入していた学童用文房具、石盤の大量需要を予感させた。そこで山本は以後、良材を産する雄勝湾左岸の明神浜に住み、開進社（のち開運社）を創立、我が国の石盤製造の嚆矢となる。明治 11 年（1878）には、西南戦争の国事犯を使役に使う出願をし、宮城県監獄雄勝分監が設置され、採掘や製造に従事させた。当初人員は 70 人、最盛期は 200 人にも及び、中には西郷隆盛の叔父もいた。ちなみにその３年後には、ドイツの地質学者ナウマンが十五浜を訪れ、岩脈を「大変な財産」と示唆している[5]。

スレート葺き職人の嚆矢は、石田潤一郎「スレートと金属屋根」（INAX 出版）[6] にあるように、明治の欧化政策の命を受けてドイツ留学した篠崎源次郎で、彼は明治 23 年（1888）に一大産地雄勝の地を踏み、後年「雄勝天然スレート㈱」を営んだ木村家にも訪れている。当家は海産物商で財を成し、明治 17 年 (1885) には明神浜の鉱区を得、石盤生産を開始した [7]。明治 22 年 (1889) に十五浜村が合併誕生した頃、浜々は活況を呈していただろう。ところが同 29 年（1896）、明治三陸津波が襲い、玄昌石生産の拠点であった宮城集治監雄勝分監でも多くの死者が出る。結局分監は閉鎖、本格的な地元民による採掘・製造販売が始まる。まさに災害によって、地場産業が覚醒した感はあったのかもしれない。全国の洋風建築はもとより、不燃屋根材への注目は多くの人々の眼に留まり、地元周辺の富裕層を中心に、徐々に民家にも普及し、やがて陸前各地のスレート産業が興っていった。

紡績産業と三井物産―綿花と雄勝玄昌石のかけはし

写真２　木村家が営んだ展示館・雄勝石ギャラリー（震災前）

さて、この明治後期から戦前期は、現在のグローバル経済の先駆ともいうべき活発な動きがみられた。文久 3 年 (1863) の長州藩によるイギリス留学生派遣を先駆として、各藩から英米への渡航が相次ぎ、紡績分野では薩摩藩によるイギリスからの最新機械導入（1867）が嚆矢となる。紡績産業が近代化＝機械化を本格化させたのは 1880 年代のことであった。生産効率が高まれば、原料調達が鍵を握ることは必至であり、国産綿花の供給はすぐに限界に達する。輸入綿花の調達先は、はじめは中国であった。大阪紡績等がその先導役となったが、間に中国商が入るため直輸入がままならない。そこで明治 22 年（1889）、農商務書記官佐野常樹がインド視察団として派遣され、同行した大阪紡の川邨利兵衛がボンベイのタタ商会からインド綿を試買し、大阪紡はタタからの一手取次契約を結ぶ。また、これに反発した大阪・兵庫の各社が明治 25 年（1892）に日本綿花（株）を設立し、先の佐野を社長に迎える。さらに三井物産は同年、安川雄之助をボンベイに派遣、翌年に出張所を開き、英国ライオン商会やラリー商会を通じてインド綿輸入を開始した。つまりこうした経過のなかで、メーカーと商社の分業が成立していったのである [8]。

日本三大海運会社の一つ日本郵船が、ボンベイ―日本間の定期航路を実現したのは翌年の明治 26 年（1893）であった [9]。この路線は、紡績企業の健全経営を支える原料供給システムにおける重要基盤となる。とはいえ、この激動期は浮沈はげしく、度々日本商社の業績は降下しインド商社が台頭してくる。この状況下で産地インドの胸元に食込む動きを見せたのが、三井物産であった。自社スタッフによるボンベイ市場での直接買い付けを増やすことで安定的な輸入、紡績企業への供給を図ったのである。大正 3 年（1914）には直買が輸入の 55% を占めるまでになり、黄金期を迎えた。ただし好調は長く続かず、黄金期に多額の投機を行った後、第一次世界大戦後の同 9 年（1920）には不況に陥る。

とはいえ、清水がカルカッタにて、阿部支店長に会った時期は、まさに三井物産がボンベイに足がかりを固めた時期と推察される。そして、雄勝天然スレートの木村氏の談とよく符合するのが、綿花積荷の復路に載った石材のはなしである。木村氏によれば、いわゆる上述のボンベイ航路において、インドへは石盤を、日本へは綿を積むのが商社として利益が大きいことから、実際、木村家でも大量にインドへ輸出したという。明治後期から大正・昭和初期は、先述のように雄勝における石盤・スレート産業の躍進期であり、これが綿貿易の黄金期に重なるのは、まさに織りなす綾と呼ぶべきであろう。阿部重兵衛が、帰りの積荷＝地元産石盤を採用した事情を知らないはずがない。むしろ、重兵衛がその仲を取り持った可能性も、少なくないだろう。

国際的な舞台で活躍する日本商社と、キーパーソンとなる十五浜の大海商の末裔。そこに交わされた綿花と雄勝玄昌石。その絆はおよそ 100 年が経過したいま再び「雄勝いしのわプロジェクト」によって掘り起こされつつある。

1)http://homepage1.nifty.com/marhir/zenzo/zenzo.htm (2014.10 参照)
2) 斎藤善之「近世南三陸の海村社会と海商」清文堂出版 ,2010
3) 阿部家（今泉家）の私家記録による.
4) 雄勝町教育委員会「雄勝町の文化財（一）雄勝町の板碑」1994
5) 大沼正寛・高橋恒夫・今泉俊郎編「写真展・天然スレートの陸前十五浜　開催記録」東北工業大学 ,2014
6) 石田潤一郎「INAX ALBUM5 スレートと金属屋根」INAX 出版 ,1992
7) 藤森照信・増田彰久「住まいと生活の情報誌『こんにちは』家の記憶 57 旧木村金次郎邸」1994
8) 黄孝春「戦前期日本における綿花輸入機構の変容とその論理」弘前大学学術研究リポジトリ ,1999
9)Marine2014 夏季号 , pp5-10

みやぎ地場産品開発流通研究会例会にて バルセロナ展示会報告

1月22日に開催された「みやぎ地場産品開発流通研究会例会」にてバルセロナ展示会が行われました。この度は、バルセロナ在住の建築家であり展示会の空間構成やグラフィックデザイン・展示デザインを担当していただいた小塙氏と藤井氏より報告をいただきました。

2014年7月4日から8月31日（パラウ・ロベルト）での報告として、「バイヤー、建築家・デザイナー、その他関係者からの評価」、「一般市民・来場者からのアンケート・メッセージ等を紹介」があり、「日本の文化や手わざについては注目度が高いという評価があった」、「スレートの磨き技術に非常に高い評価を受けた」などがありました。また石皿の用途開発の可能性では、バルセロナのレストランを中心に、市場調査の実施頂き、硯の加工技術を活かした、斬新な食器の開発など、用途についても自由な意見がもたらされました。

また、例会での報告だけでなく、小塙氏らは現地視察も実施し、新たな商品展開の可能性について、雄勝硯生産販売協同組合との意見交換会を行いました。

復興大学にて雄勝いしのわプロジェクト実績報告

本プロジェクトが、復興大学のワンストップサービス事業部門の支援を受けていることから、3 月 26 日（木）にアエル復興大学にて、平成 26 年度の本プロジェクト事業報告を行いました。

代表の菊地からは、場づくり（仮設工房建設オープン）・モノづくり（国内外の展示即売会等）・人づくり（生産参画の学生ボランティア等）の実践内容を詳述しました。モノづくりの実践事例として、SD 学科 4 年の佐藤翔君（菊地研究室）が取り組んだ、雄勝石の未利用材活用製品の内容を発表しました。ちなみにこの製品に関しては、組合もぜひとも実現したいとのことです。

雄勝現地調査　未利用材づくり

現在、本プロジェクトでは雄勝石の未利用材を使用した新たな商品を提案するべくワークショップやイベント時に様々な方の御意見を聞き、商品化を進めています。

今回は教職員と学生で雄勝に出向き、そのための材料づくりを現地で行いました。主には雄勝石の未利用部分を砕く作業です。砕いて鋭角を除いた雄勝石を使って、思い思いのオブジェや鉢植え、小物入れなどを作成してもらう「雄勝石手づくりキット」を現在検討中です。

雄勝いしのわシンポジウム開催

一番町ロビー安全安心生活デザイン学科ウィーク

安全安心生活デザイン学科ウィーク（通称 SD ウィーク）が 3 月 6 日～ 3 月 11 日に一番町ロビーで開催されました。期間中の 3 月 6 日（金）には、一般市民参加の「雄勝いしのわシンポジウム」を行いました。

最初に雄勝硯生産販売協同組合の千葉事務長より雄勝町の現状や雄勝硯・石製品について歴史や特徴、商品紹介などを話していただきました。その後、本プロジェクト代表の菊地良覺より、「東北工業大学・雄勝硯生産販売協同組合産学連携事業（三井物産環境基金　復興助成事業 2 年目の動き）」について報告がありました。報告内容は、「場づくり（仮設工房の開所や工房の環境整備）、モノづくり（スペインバルセロナや熊本県での企画展示販売会や商品開発提案）、人づくり（当面はボランティア参画や現地交流の促進）、穂広報活動（HP やパンフレット・ニュースの作成等）」となりました。

続けて本学科学生の雄勝町の復興をテーマにして取り組んだ卒業研究の報告と意見交換を行いました。学生の研究テーマは「雄勝石の未利用材活用の商品開発に向けて」、「仮設工房周辺カスタマイズ～回廊型パーゴラや組み立て式ベンチ制作」でした。
また組合の高橋頼雄氏より「組合の若手職員による新商品開発に向けた試作品について」の紹介があり、会場からは様々な意見がありました。本プロジェクトの雄勝石のオブジェ制作や商品開発に参画していただいているフローリストマイスターの齋絢子氏からも新商品開発に向けた提案がありました。次年度は本プロジェクトの最終年度となりますが、雄勝町の復興はこれからです。

三井物産株式会社
東北支社長 佐藤 秀之氏来学

本学安全安心生活デザイン学科の教員が関与する「雄勝いしのわプロジェクト」に対し助成する三井物産株式会社 東北支社長 佐藤 秀之氏（仙台市出身）が、1 月 2 8 日（水）来学し、岩崎 俊一 理事長ならびに宮城 光信 学長と懇談しました。この懇談は、本プロジェクトメンバーである本学 安全安心生活デザイン学科 大沼 正寛 准教授が行っていた雄勝地域の歴史調査の結果、旧三井物産が明治期に雄勝石の「石板ノート」をインドに輸出していたことを確認し資料にまとめた契機により、実現に至りました。懇談では、本プロジェクト代表の本学同学科 菊地 良覺 教授が雄勝石と旧三井物産の歴史的関係などについて説明した後に、大学と三井物産とのこれからの地域振興・人材育成・グローバル展開などに関して話し合いました。

国連防災世界会議　ロビー展　雄勝プロジェクト紹介

2015 年 3 月 14 日（土）～ 18 日（水）、世界各国の代表が国際的な防災戦略を議論する国連主催の会議「第 3 回国連防災世界会議」が仙台市で開催され、それに合わせて仙台市内では様々な防災や減災、復興に関する取り組みを公開するイベントが行われました。

東北工業大学が関連イベントとして一番町ロビーで開催した「東日本大震災の復興支援に関する展示」にて、本プロジェクトもパネルやスライドショーでの出展を行いました。

活動記録

2014

11/18-24　熊本県伝統工芸館　展示会
11/20　河北新報掲載（新鮮ホタテ大人気）
11/21　河北新報掲載（復興グルメ F-1 大会　おがつ店こ屋街にも賞）
11/27　河北新報掲載（東北の手業一堂に）
11/28　河北新報掲載（体験型で科学身近に　30 日石巻でサイエンスデイ）
11/29　あすと長町仮設住宅にて石製品づくりワークショップ
11/30　雄勝ワークショップ（学都仙台・宮城サイエンスディ in 石巻）
12/1　河北新報掲載（古式神事「湯立」を守る　霧月神楽と雄勝法印神楽）
12/2　河北新報掲載（科学の目で地域を知る石巻を会場にサイエンスデイ）
12/3　石磨きボランティア
12/4-10 せんだいデザインウィーク　展示
12/5　せんだいデザインウィーク（ワークショップ「玄石七様」）
12/7　河北新報掲載（被災地　当時と今　雄勝硯伝統産業会館）
12/9　せんだいデザインウィーク　ワークショップ　角田 寛 氏
「デザインの観点 / 海外、バルセロナから見た日本、東北」
12/30　朝日新聞掲載（「地域団体商標」登録見通し）

2015

1/1　河北新報掲載（伝統守り海外進出）
1/7　河北新報掲載（宮城の粋　文鎮に結集）
1/16　雄勝いしのわプロジェクト実行委員会
1/22　みやぎ地場産品開発流通研究会
1/24　河北新報掲載（地域団体商標）
1/26　河北新報掲載（あちこちなるほど　探訪記　よみがえった雄勝石）
1/28　三井物産　学長訪問
1/30　朝日新聞掲載（帰ってきた硯のけんちゃん）
2/16　河北新報掲載（被災の雄勝硯　登録）
2/18　河北新報掲載（東北再生へ思い共有）
3/6　一番町ロビー公開講座
2/5　朝日新聞掲載（東北の職人技工芸品見て）
3/17　復興大学での報告会
3/13 ～ 18　東北工業大学復興支援 パネル展（プロジェクト紹介）
3/26　雄勝現地調査　未利用材づくり

今年度の活動内容

プロジェクト助成は最終の 3 年目を迎え、3 本柱「場つくり」「モノづくり」「ヒトづくり」の活動は以下の通りとします。

「場づくり」

新雄勝硯伝統産業会館の建設に伴い、施設ソフト面（展示・企画・販売とその体制と運営方法等）の計画支援

「モノづくり」

未利用材活用の新商品化及び国内外の展示即売会等への継続支援
学生ボランティアによる製品づくり支援

「ヒトづくり」

後継者育成を前提とした、商品製作マニュアル等の作成
公的助成金獲得のための企画立案等

「子どもを育む地域づくりを考える」シンポジウム風景

NPO 法人雄勝まちづくり協会が主催し、4 月 19 日に開催されました。第 1 部は「ドキュメンタリー上映：石巻市雄勝小学校　震災 2 年目の実践」、第 2 部は雄勝地区内で再生のための実践する、雄勝硯組合も含めた各種団体のパネリストによるディスカッションが行われました。

編集後記

新雄勝硯伝統産業会館の建設が今年度中に実施設計が完了予定です。それに伴い本プロジェクトも新施設のソフト面の具現を目指すことになります。ハード面が特化しがちにならないように施設内の「ヒト・モノの動き」「生産と販売との効率的な姿」「次世代に繋げなければならない知恵や技が見える企画」等を組合と協働で組みたてていくことになります。また、商品開発・流通開発等の企画に関しては、これまで以上の充実した内容にしていきたいものです。雄勝を支援継続している諸団体との連携も行いつつ、持続可能な地域構築のための再生をプロジェクト一同が一丸となって邁進していきたいと思います。（菊地良覺）

雄勝いしのわプロジェクト
～雄勝石産業を核とした場づくり、モノづくり、人づくり～

発行元：東北工業大学
ライフデザイン学部　安全安心生活デザイン学科

〒982-8588　宮城県仙台市太白区二ツ沢 6 番
TEL: 022-304-5592　FAX: 022-304-5591
MAIL: info@ogatsu-ishinowa.jp　URL: http://ogatsu-ishinowa.jp/

＊本プロジェクトは「雄勝石産業の復活を核とした生産とくらしの再生」をテーマに
三井物産環境基金 2012 年度下半期活動助成（復興助成）の採択を受け活動を実施しています。